●「教える」とは、希望を語ること。「学ぶ」とは、誠実を胸に刻むこと。（ルイ・アラゴン）

連絡会ニュース

子どもと教育・くらしを守る広島県立学校教職員連絡会

No.1300 2024/08/29（Thu）

発行　広島高校連絡会事務局
Email renraku-kuko@mx6.tiki.ne.jp
HP　http:// ww6.tiki.ne.jp/~renraku-kuko/
携帯 090－1180－7644（村井義幸）
090－9738－8264（望月照巳）

民主々主義とは？正義とは何か？

1970 年代まで民主々主義とは自然物（当たり前のもの）であった

小学校から、放課後の委員会とホームルームを利用しての、様々な「話し合い」に基づく「決定」。1950 年生まれの私（たち）にとって、それは、自然物のように当たり前に「存る」ものだった。その決定に基づく、様々な委員会活動や、クラスでの行動決定、そこには司会者（と議長の区別もままならないけれど）の苦労も又、学習し続けてきた。

それらの実践の到達点として、「生活指導」の《班・核・討議づくり》があった。義務制を中心にした全国生活指導研究協議会（全生研）と、その理論を受け継いだ高生研の実践が広がって行き、児童会・生徒会活動を通じて、民主主義を学び、自らの力にしてゆく生徒たちが、生まれていった。

ただ、《班・核・討議づくり》の実践が、一定の行き詰まりを見せて、緩やかな流れに変化していった、その事情と整理については、私は原水協の役員となり、夏の研究大会時期が重複したこともあって今も詳細には知らないままである。

「戦後民主々義ナンセンス！」と罵倒した全共闘

「７０年安保」と称された１９７０年代、大学では当局と学生の「団体交渉」いわゆる「団交」と、大学ストライキ。そして、ゲバ棒（角材）を持って機動隊と衝突したり、バリケード封鎖で校内に立てこもったり等々の無法な行動と理論が一世を風靡した。全共闘には、「中核」「革マル」「ブンド」、さらに「毛沢東盲従派」なども混在して、学生大会での決定を，暴力で踏みにじることも多々経験した。勿論、民青の大集団が存在していた。

私たちが，「トロツキスト」と呼んだ彼らの盲動は、戦後の民主主義によって保護された「安全地帯・温室」で繰り返され、やがて当局の徹底管理へと終結に向かった。入学金３万円、授業料５００円の学費だと、仕送りなしでも奨学金だけでも、少しのアルバイトで、十分生活でき活動もできた。（= 貧乏人でも学びが保証されているなぁと実感したことを良く覚えています。）そこから、連続的な学費値上げによって、学生運動などやってる暇などなく、アルバイト漬けでようやく生活せざるを得ない多くの学生を生む現在の大学へと変貌してゆくことになりました。

民主々義とは多数決との理解が広がる

それでも、７０年代後半までは高生研の元気だったし、生徒会活動でもかなり自由に活動を展開することができた。しかし同時に、気になっていたのは何かを決めようと、生徒に投げかけたとき、「（論議なしで）多数決で決めよう」とする生徒の広がりだった。「部落解放同盟」の蛮行と理論の野蛮な介入があり、生徒が民主主義を学ぶ機会と空間は、どんどん狭まっていったのです。

その結果、生徒・学生・社会人の成長過程で、民主主義の方法や意義を学ぶ機会はほとんどなかった青年たちが,生まれて行き、「無党派層」（という名の「非政党」支持層）が多数派になっています。

それでも、悪いことは後ろめたさを抱えながら行ってきた

かつては、自民党でも「専守防衛」を本気で守って、「自衛隊は一歩たりとも海外にださない」（野中広務元幹事長・官房長官）や、しんぶん赤旗にも登場した古賀誠氏などは、戦争体験者として憲法９条を守り、米国の軍事増強路線に、抵抗もし続けてきた。だから、軍事費を増やすことにも「心ならずも」「本当はすべきではないが」との心情が垣間見えたものだったが、小泉純一郎が登場すると、法令上、「自衛隊の『戦闘地域』への派遣は出来ない」ことの質問で、「派遣先がどうして、『非戦闘地域』であると言えるのか？」と質問されて、「派遣するのだから、『非戦闘地域』である」と答え、私はびっくり仰天だったが、マスコミもその没論理を批判することもなかった。さらに時代が安倍晋三になると、裏表なく、私欲を優先する権力者の登場だった。その最終章は、「身内優先」の違法なことさえも権力を使って証拠隠滅を図り、ついには検察の人事にまで権力を使って介入する酷さだった。公的な財源を私的な懐に移

し替えて恥じることのない首相の登場で、「悪いことは、陰でコソコソ」行うものという常識が崩れ、表に出れば恥ずかしい行為でも、「それが何か」と居直ることが権力者の特権だと認める社会が実現した。

「私は、国民によって雇われている」と常に口にしていた、近畿財務局の職員だった赤木俊夫さんは、公文書改竄を指示され、それに手を染めたことを苦に自殺するに至りました。

「維新」がもてはやされる理由と、結局は正体が暴かれる現実

安倍政治が引き起こした格差拡大社会と、小泉純一郎と、竹中平蔵が導入した非正規労働者が半数を超え、国民の多数が、貧困の中に落ち込む一方、大企業は大幅な法人税減税によって、内部留保（儲け）を増やし続ける不公正な状態が続いている。それなら、こんな状態を作り上げてきた原因を、これまでの既成政党と一括りにして、自民党も共産党も「同じ」という荒っぽい論理が、スマホの短文だけしか、見ない多くの人に受け入れられ、「既成政党」を否定して何か新しいような、元気のよいような口先だけはベラベラ回る集団に人々の,注目が集まるようになる。

けれども、既に「維新」の化けの皮は剥がれた。

民主々義と正義の再構築を！教育の再建を通して

民主々主義が「少数意見の尊重」を謳っているのは、そうすることで出来るだけ全員が、その「決定に参加した」という実感をもつこと。その実感が、「決定」に対する「責任」を生む事。だから、その決定が間違っていたとき、「その責任は私にもある」と言う（感じる）人だけが、誤りの結果を受け入れて新たな一歩を踏み出す事になるからです。

「民主的な決定」とは、だから「皆が『やや不満』そうな」感じで、話の決着がつくことになります。

賢明な独裁者が、正しい選択をする限り、圧倒的に能率が良いのですが、どんな天才的な人物でも、必ず間違いを犯すことがあります。その時誰も、「この失敗に責任を感じる人」はいません。決定権は独裁者が握っていたからです。

安倍政治後の、自民党の荒廃した状況がそれを物語っています。残っているのは、イエスマンと次の権力で、まだ残っている公的な財産を私的に取り込もうと狙っている輩だけです。

私たちが、経験してきた、広島県教育現場での、多数決で押し切り「私たちのどんな『修正案』もゼロ査定」というのは、民主主義とは、真逆の路線だったのでした。そうして、解放教育派の連中は、多数に胡坐をかき自らの論理を、磨く機会を失い結局のところ「是正指導」によって、全否定されることになりました。

今度の衆議院選挙で、日本の再生を担える政治状況を生み出す為に

以上のすこし長めの日本史を踏まえるなら、今度の衆議院選挙では、今後１０年単位で日本をどうする？かを決定する選挙になるでしょう。市民と野党の共闘も様々な妨害（によってのみ、自民党政治の延命を図ることができるので、あらゆる知恵が投入されるでしょう。都知事選挙における石丸伸二氏を擁立した知恵のように ）が、展開されるでしょう。その妨害を撥ね退ける勇気と力を身につけたいものです。

それが、日本の民主々義再生への道だからです。腕を組んで、観客席から声援や批判をするだけでは、前に進む大勢力を創ることは出来ません。　　（ 村井 義幸 ）

余録

▼オリンピックの選手が、前回のオリンピックで敗北した反省から、その精神、心構えを学びに単身、訪ねた人物がいた。麻雀界で２００勝無敗、伝説の人、雀鬼と呼ばれる桜井章一氏という▼どんな人物だろうと、調べてみると、確かに本質的なことを語っていた。曰く「勝敗には４段階」がある。理想的なのは「良い内容で勝つ」、次に望ましいのは「良い内容で負ける」、次に望ましいの「悪い内容で負ける」ことであり、最も下なのは「悪い内容で勝つ」ことである▼えぇ？勝てば良いのではないかと、つい考えてしまう。しかし、彼は、「悪い内容で勝つ」と品性が無くなるという。結局は、勝つために手段を択ばなくなり、それは生き方に反映してくるから、やがて信用を無くして、運も離れて行くと▼我々は、「良い内容で負け続けた」のだと思う。反対派の意見を切り捨てることが、結局は多数派のものと思っていた体制をも崩壊させる▼そのことを骨身に刻んで、秋の闘いに、日本再生に、いざ！

2024/08/29